

## 三陸沿岸漁業の生活経験と震災遺構 —岩手県大槌町の事例—

東北大学大学院文学研究科 人間科学専攻

坂口奈央

### 論文要旨

本論文では、地域住民が震災遺構に対してどのような意味を付与してきたのか、また、震災遺構の保存や解体をめぐるなぜ対立に至ったのかについて、三陸沿岸の漁業集落における生活経験を背景にしながら解明する。そして、被災地域住民にとっての震災遺構とは、生活の脈絡の中で再定義される特性をもつ、「生きられている」存在であることを実証的に明らかにする。

調査対象地は、東日本大震災で甚大な被害を受けた、岩手県大槌町である。大槌町は、東日本大震災における犠牲者率がもっとも高く、犠牲者のなかには町長と、役場職員 39 人が含まれた。さらに、役場庁舎の建物が被災したことで、町政運営が発災後一時期麻痺した。こうしたなかで、大槌町では、被災地の言葉でいう「おらほのまちはおらほで」といった住民主体の復興まちづくりが、様々な形で展開された。大槌町は、住民主導の地域づくりを検討する上でも、重要な調査対象地である。

大槌町には、全国的な注目を浴びた 2 つの震災遺構が存在していた。一つは、津波によって突如もたらされた、観光船が 2 階建ての民宿に乗り上げた光景（後に船は撤去）によるものである。当初、船を震災遺構とし、地域内で犠牲になった人びとへの祈りの場として「鎮魂」のために船を復元・保存する「被害のシンボル」とする方向で住民合意が図られた。その後、地元婦人会のメンバーが、観光資源として震災遺構を活用し、雇用を創出する場とすることを提案したため、住民対立に発展した。その背景には、海と陸との分業にもとづく地域構造と、漁業集落特有の切実な現実が存在していた。婦人会メンバーの夫の多くは、三陸沿岸で隆盛した遠洋漁業船の乗組員であり、海難事故などによる家族の突然の死が身近にあった。こうした究極の生活経験から女性は、経済的および精神的な自立が求められてきた。また、夫が遠洋漁業に従事する間の陸上での活動は女性が中心で、女性主体による重層的な地域活動が展開されてきた。このため婦人会メンバーには、これまで地域活動は自らが担ってきたという自負があった。船は、被災前の生活経験を想起させるのに十分な対象物であり、観光資源としての震災遺構としての意味づけでもある「記憶のシンボル」としての意味を生成し、震災を地域再生への好機ととらえた背景には、こうした事情が存在した。

もう一つは、町長および役場職員が犠牲になった場所であり、震災遺構としての保存の是非が取り上げられた旧役場庁舎である。町内でも、震災遺構のあり方を巡って論争となるなかで象徴的に語られた言葉が、解体を望む人たちによる「恥の場」という表現だった。「恥の場」と表現した人びとが旧役場庁舎に重ねて想起していた被災前の生活経験は、漁業による経済的発展と人びとの勢いに満ちていた時代、また、漁業の衰退に伴う関連事業の相次ぐ

閉鎖や、人口流出という社会的課題に太刀打ちできないなかで孤立性を深めていく、その後の大槌町の様相であった。解体派は、震災時 60 代前後の男性が多いが、この世代による生活経験には、漁業による強烈な「プライド」と「挫折」があった。震災後の大槌町に向けられる外部者の好奇なまなざしがきっかけとなって、皮肉にも、こうした記憶が旧役場庁舎に重ねられ、大槌町を外部のまなざしから守ろうとする「われわれ意識」が醸成されていき、それが「恥」という象徴的な表現になって表れた。最終的に解体という声が大槌町内に高まり、旧役場庁舎は解体された。

全国的な注目を集めたこの 2 つの震災遺構には、いずれも学術的専門家や公的機関、報道関係者による高い関心が寄せられたが、他方大槌町では、住民自らが震災遺構と位置付けたものがある。それは、島という自然物である。住民は島に対して、震災前から親しみのある地域資源としての意識を共有してきた。震災後、津波に飲み込まれた島の微妙な変化を意識することで、島への意味付与が少しずつ変化した。また被災地域の住民は、避難所生活や仮設住宅などの共同生活を通じて、島の思い出を語り合うことで、次第に、何を目指して復興するのかを問い直すようになり、その過程で導き出した結論が「島に見える生活」だった。島に関連するインフラ整備は、発災から 5 年で完了したが、住民は被災前と同じ島とはとらえていない。島に対する意味も変化していき、被災地域の住民は、島に見える生活を取り戻すことを復興の目標に掲げ、島を「復興のシンボル」としての震災遺構、と意味付けたのである。

岩手県大槌町には、このような 3 つの震災遺構をめぐる議論があった。それぞれの震災遺構に対する被災地域住民の意味付けとそのプロセスは、復興のシンボルとして一本化されていた事例もあれば、観光資源という意味をめぐり住民間対立に至った事例、さらに、解体を主張した住民により、犠牲者の出た対象物を「恥の場」と表現する人たちが現れ、町内全体が混沌とした事例と、それぞれに大きく異なっていた。

以上のことから、被災地域の住民にとって震災遺構とは、被災した経験とともに、かつての被災前の生活経験の記憶とが複雑に絡み合う対象物であることが明らかになった。また、住民の視点でとらえた震災遺構と、工学的観点による震災遺構の評価は、ほぼ真逆であった。工学的観点の判断基準が、建物がもつ津波の痕跡という実態そのものにクローズアップしているが、被災地域の住民は、震災遺構に対して、被災前も含めた生活経験にもとづく視点で、新たな意味を「生成」しているからである。さらに、震災遺構への意味の立ち現れ方の違いを決定づけたのは、地域資源か否かという点、もう一つは、マスメディアや震災後関与するようになった外部支援者などによる語られ方であり、それによって、被災前／被災後という当該地域の時間の流れのなかで、震災遺構が被災地域住民に対してどのように立ち現れてくるのが異なってくる。以上より本研究は、従来の震災遺構研究に対する新たな地平を拓いたと言える。震災遺構とは、被災した地域住民の視点および意味をとらえ直すことで、これまで不透明だった誰のため、何のための震災遺構なのかについて、明確にして初めて、伝承としての社会的価値をもつ震災遺構となる。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	坂口 奈央
論文審査担当者	(主査) 教授 小松 丈晃 教授 長谷川 公一 教授 永井 彰 教授 佐藤 嘉倫 准教授 田代 志門
論文名	三陸沿岸漁業集落の生活経験と震災遺構—岩手県大槌町の事例—
<p>本論文は、岩手県大槌町での東日本大震災による震災遺構の保存の是非をめぐる議論を、被災後のみならず被災前の漁業集落における住民の生活経験を踏まえながら社会的に分析したものである。</p> <p>まず序章では、本論文の目的と方法が提示された後、生活の脈絡の中の震災遺構、地域住民と学術的専門家等との間の解釈の差異、震災遺構ごとの意味付与の多様性という、以下の論述の基軸となる三つの観点が示される。</p> <p>続く第1章では、東日本大震災以前と以後の震災遺構に関する先行研究が検討され、遺構への住民による意味づけを、被災前の当該対象物と被災地域住民との関係等を視野に入れつつ論じるという観点の不在が指摘される。</p> <p>第2章で(主として戦後の)大槌町の産業構造、集落ごとの漁業形態の相違とその変化、また地域住民組織の特徴について検討された後、第3章では、被災前から長年赤浜地区住民に親しまれていた島(蓬莱島)が、津波被害を受けつつも残存していたことから、被災住民によって、復興のシンボルとしての震災遺構との意味づけがなされていく過程が分析される。このことにより「島が見える生活」ができるよう住民が防潮堤を従来どおりの高さにするとの決断にいたった経緯が明らかにされる。</p> <p>続く第4章で論じられるのは、津波によって民宿の上に乗上げた観光船「はまゆり」号の事例である。赤浜地区婦人会は、これを観光資源として復元・活用する方向を打ち出し、他の住民と対立する。遠洋漁業で栄えた被災前の赤浜地区の地域活動を担ってきたのは女性であったとの自負、また海難事故による家族の突然死がつねに身近にあったがゆえの漁業集落での生活、がこの主張の背景にあったことが示される。</p> <p>第5章では、町長はじめ多くの職員が津波の犠牲となった大槌町旧役場庁舎が論じられる。報道等をきっかけに、この旧庁舎を「恥の場」として解体を主張する住民が現れ、震災遺構としての保存の是非を巡り住民間で対立が起こるが、この主張は、役場の対応への直接的な批判のみならず、漁業の衰退で人口が流出していく大槌町にさしたる貢献ができなかった自身への反省の念に基づくものであることが、明らかにされる。</p> <p>結章では、以上の各章における論述を全体的に総括しながら、あらためてこの研究の意義と成果について述べ、今後の震災遺構に関する研究を進める上での課題を指摘している。</p> <p>以上のように、本論文は、従来の震災遺構研究に欠如していた観点を補い、今後の震災遺構研究を進める上での新しい分析視角を切り開いたものとして高く評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	